

■部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」2020年度開講科目  
(教室などは変更されることがあるので、必ず開講部局でご確認ください。)

□必修科目

文学部4200031

教授 堀江 宗正ほか「死生学概論」(死生学の射程) 2単位 A1+A2 金3 法文二号館一番大教室

死生学に関連する研究をおこなっている文学部・人文社会系研究科の教員が、死生学の主なトピックを取り上げて、現在の研究状況を概説する。それぞれ、人間の死と、死にゆく過程での生をめぐる諸問題、またそれらに関する思想や実践が取り上げられる。死生に関する多様なアプローチを学び、学際的思考の基礎を養う。なお、本講義は「応用倫理概論」と共に、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

- 第1回 死生学とは
- 第2回 死生学と宗教
- 第3回 日本仏教の死生観
- 第4回 近代日本の死生観
- 第5回 日本人の慰霊
- 第6回 韓国の墓と祖先への追慕
- 第7回 ゲームのなかの死
- 第8回 大学生の自殺予防
- 第9回 ケアの死生学
- 第10回 脳死の二重基準の意味と意義
- 第11回 死の定義と法
- 第12回 個人閉塞した死と共鳴する死
- 第13回 他者の死と自己の死
- 第14回 試験

文学部04200061

教授 池澤 優ほか「応用倫理概論」(応用倫理入門) 2単位 S1+S2 金3 法文二号館一番大教室

科学と技術が我々の生活を飛躍的に便利にし、膨大な情報をもたらし、寿命を延ばすに従い、これまでは考えられもしなかった様々な問題が生まれてきた。果たして人間にとって科学技術とは何なのか、何であるべきなのか。いま現在生きている人間たちだけの経済や効率を技術的に優先させた合理性は、はたしてまだ存在しない次の世代に、理不尽な負担を押しつけることにならないのか。そうした哲学的・思想的であると同時に実践的・現実的な諸問題を根本から問い直すべく、生命倫理、環境倫理、技術倫理、情報倫理、さらには世代間倫理といった、いわゆる「応用倫理」といわれる新しい学問領域が、いま強く求められてきている。本講義は、その分野に関する俯瞰的な概説を行うものである。

応用倫理は、本来的に幅広い分野を包含し、多様な方法論を必要とする分野であるため、本年度はオムニバス形式で生命倫理、臨床倫理、環境倫理、研究倫理、現代倫理、技術倫理に関して順次講じていく予定である。担当講師と講義内容は以下の通りである。

- 第1回 4月17日 イン트로ダクション(池澤)
- 第2回 4月24日 臨床倫理(会田薫子)

第3回	5月1日	生命倫理(1)—生命倫理の成立 (池澤)
第4回	5月8日	生命倫理(2)—パーソン論 (池澤)
第5回	5月22日	生命倫理(3)—脳死・臓器移植 (小松美彦)
第6回	5月29日	現代倫理—人間の尊厳 (小島毅) (補講日)
第7回	6月5日	現代倫理—エーリッヒ・フロム (出口剛司)
第8回	6月12日	研究倫理 (池澤)
第9回	6月19日	環境倫理(1) (福永真弓)
第10回	6月26日	環境倫理(2) (福永真弓)
第11回	7月3日	世代間倫理 (堀江宗正)
第12回	7月10日	まとめ (池澤)

(なお副題は仮のものである。担当教員と順番は変更することがある。)

本講義は「死生学概論」となれば、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

#### □選択必修科目

文学部04200051

教授 小松 美彦「死生学演習Ⅰ」(生権力・生物医学・生資本主義) 2単位 S1+S2 水4 法文  
一号館218教室

近年の生物医学の進展はとどまるところを知らない。そうした状況にあつて、私たちの生と死はいかなる「もの・こと」となっているのだろうか。この問題を、生権力・生政治・生資本主義の観点から考察する。また、その考察を通じて、批判的理性と批判的感性を錬磨することを目指す。下記の著書を主要テキストとして通読する。

G.アガンベン『ホモ・サケル—主権権力と剥き出しの生』(以文社、2003年)。

M.フーコー『社会は防衛しなければならない』(新潮社、2007年)。

R.エスポジト『近代政治の脱構築—共同体・免疫・生政治』(講談社メチエ、2009年)。

小松美彦『生権力の歴史—脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐる』(青土社、2012年)。

文学部04200052

教授 池澤 優「死生学演習Ⅱ」(死生学基礎文献講読) 2単位 A1+A2 金3 法文一号館219教室

死生学の重要文献を日本語で講読する演習。本演習は今まで、シリーズ『死生学』全5巻(2012年度)、アリエス『死を前にした人間』、ゴラー『死と悲しみの社会学』、キューブラー=ロス『死ぬ瞬間』、加藤周一ほか『日本人の死生観』、エルツ『死の宗教社会学』(2013年度)、ニーメイアー『喪失と悲嘆の心理療法』、樽川典子『喪失と生存の社会学』、デーケン『新版死とどう向き合うか』、シュナイドマン『シュナイドマンの自殺学』、新谷尚紀『お葬式』(2014年度)、清水哲郎『ケア従事者のための死生学』、平山正実『死生学とはなにか』、石丸昌彦『死生学入門』、岸本英夫『生と死』、竹内整一『花びらは散る 花は散らない』、島菌進『日本人の死生観を読む』、森岡正博『生者と死者をつなぐ』(2015年度)、ジャンケレビッチ『死』、フランクフル『死と愛』、宇都宮輝夫『生と死を考える』、澤井敦・有松賢『死別の社会学』、高橋祥友『自殺予防』(2016年度)、ベッカー『死の拒絶』、門林道子『生きる力の源に—がん闘病記の社会学』、山本俊一『死生学のすすめ』、高橋聡美『グリーフケア』(2017年度)、ボードリヤール『象徴交換と死』、リフトン『ヒロシマを生き抜く』、カステンバウム『死ぬ瞬間の心理』、メイヤロフ『ケアの本質』(2018年度)、ケーガン『「死」とは何か?』、岩崎大『死生学』、大林雅之『生命の問い』、高橋隆雄『生命・環境・ケア』、島菌進『ともに

悲嘆を生きる—グリーフケアの歴史と文化』（2019年度）を講読してきた。本年度は比較的最近出版された書を主対象として、以下の5冊を読みたいと考えている。

ハンス・ヨーナス、細見和之ほか訳『生命の哲学—有機体と自由』、法政大学出版会、2008。

ドイツ連邦議会審議会答申、松田純監訳『人間の尊厳と遺伝子情報—現代医療の法と倫理（上）』、『受精卵診断と生命政策の合意形成—現代医療の法と倫理（下）』、知泉書院、2006。

安藤泰至編『「いのちの思想」を掘り起こす—生命倫理の再生に向けて』、岩波書店、2011。

川島大輔・近藤恵編『はじめての死生心理学—現代社会において、死とともに生きる』、新曜社、2016。

ロバート・リフトン、渡辺牧ほか訳『現代（いま）、死にふれて生きる—精神分析から自己形成パラダイムへ』、有信堂、1989。

講読する書は多方面に及ぶが、現代的な諸問題に対面する中で、死生学という領域が如何なる視点と方法論を開拓しようとしているかを考えてゆくのが基本的な目的である。

文学部04200053

教授 堀江 宗正「死生学演習Ⅲ」（自殺研究） 2単位 S1+S2 金2 法文一号館116教室

自殺に関する研究にはさまざまなアプローチがある。哲学、歴史学、心理学、社会学、宗教学などである。この演習では、比較社会学と近代史と経済学の立場から自殺をとらえた、ボードロ&エスタブレ『豊かさのなかの自殺』を取り上げ、議論を深めてゆく。

文学部04200054

特任准教授 早川 正祐「死生学演習Ⅳ」（病いの語りをめぐる倫理） 2単位 S1+S2 水2 法文一号館217教室

人間は、病いとともに生きていくことを余儀なくされたとき、これまで自明視していた人生の意味を深く問い直すようになる。このような意味の問い直しの過程で、当事者が語るということや他者がそれを聞き届けるということは、極めて重要な役割をもっている。しかしながら、ここで注意すべきは、病いの苦しみを語ることやそれを聞き届けることが、多くの場合、困難に満ちたものになるという点である。それゆえ、その困難さを念頭に置きつつ、病いをめぐる体験とその意味について考察することが求められる。

そこで本演習では、病いに関する物語論の古典であるアーサー・フランクの『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』=Arthur W. Frank, *The Wounded Storyteller: Body, illness, and Ethics* を講読する（訳本でも可）ことで、病いの語りがどのような複雑な意味と効果をもつのかをその社会的含意も含めて考えていく。より具体的には、病いの語りの三類型である回復の語り・混沌の語り・探究の語りがどのようなものであるのか、また相互にどのような関係にあるのかを考察する。それと同時に、コミュニケーション・身体・脆さ（vulnerability）・傾聴・証言・苦しみ・多声性といった臨床倫理における重要概念が、どのように捉えられているのかを検討する。とりわけ、ポジティブな回復の語りからはらむネガティブな性格や、私たちの身体や生産性重視の社会がはらむ閉鎖的・排他的な側面等を批判的に見ていく。そのことを通して、従来の臨床倫理では見落とされている、病いの複雑な体験に根ざした倫理や責任のあり方、またコミュニケーションのあり方を根本的に考察する。

文学部04200081

教授 池澤 優「応用倫理演習Ⅰ」（環境倫理文献講読） 2単位 S1+S2 火5 法文一号館219教室

文学部04200082

いわゆる環境倫理と呼ばれる分野における重要文献を日本語で講読する演習。本演習では今までJ. Miller, D. S. Yu, & P. van der Veer ed., *Religion and Ecological Sustainability in China*, M. Tucker & D. Williams ed., *Buddhism and Ecology: the Interconnection of Dharma and Deed*（2015年

度)、リン・ホワイト『機械と神—生態学的危機の歴史的根源』、ロデリック・ナッシュ『自然の権利』、アラン・ドレングソン、井上有一『ディープ・エコロジー—生き方から考える環境の思想』、ピーター・シンガー『動物の解放』、J. E. ラブロック『地球生命圏—ガイアの科学』、トマス・ベリー『パクス・ガイアへの道—地球と人間の新たな物語』(2016年度)、ファン・ポッター『バイオエシックス—生存の科学』、アルド・レオポルド、『野生のうたが聞こえる』、岩崎茜『アルド・レオポルドの土地倫理—知的過程と感情的過程の融合としての自然保護思想』、石山徳子『米国先住民族と核廃棄物—環境正義をめぐる闘争』、ジョン・パスマア『自然に対する人間の責任』、鬼頭秀一『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』(2017年度)、ウルリヒ・ベック『危険社会—新しい近代への道』、ベアード・キャリコット『地球の洞察—多文化時代の環境哲学』、ジェームス・スワン『自然のおしえ 自然の癒し—スピリチュアル・エコロジーの知恵』、桑子敏雄『生命と風景の哲学—「空間の履歴」から読み解く』(2018年度)、シュレーダー=フレチェット『環境の倫理』、R.D.ソレル『アッシジのフランチェスコと自然—自然環境に対する西洋キリスト教的態度の伝統と革新』、クレッカー&トゥヴォルシュカ『環境の倫理』、福永真弓『多声性の環境倫理—サケが生まれ帰る流域の正統性のゆくえ』(2019年度)など、環境倫理に関する著名な著作を講読してきた。本年度は以下の書を読むことを予定している。

コンラート・オット&マルチン・ゴルケ編、滝口清栄ほか訳『越境する環境倫理学—環境先進国ドイツの哲学的フロンティア』、現代書館、2010。

フランク・ユケッター、和田佐規子訳『ナチスと自然保護—景観美・アウトバーン・森林と狩猟』、築地書館、2015。

尾崎和彦『ディープ・エコロジーの原郷—ノルウェーの環境思想』、東海大学出版会、2006。

石坂晋哉『現代インドの環境思想と環境運動—ガンディー主義と〈つながりの政治〉』、昭和堂、2011。

真実一美『環境と開発—インド先住民族、もう一つの選択肢を求めて』、世界思想社、2001。

今年の演習で講読する書はドイツ、ノルウェー、インドを扱ったものになる。それぞれの文化が環境思想や環境運動にどのように影響を与えているかが焦点になる。

特任教授 会田 薫子「応用倫理演習Ⅱ」(質的研究法入門) 2単位 S1+S2 火5 法文一号館319教室

社会における事象の捉え方には大別すると量的研究法と質的研究法があり、保健・医療・福祉また社会学・心理学分野においては特に数量的なアプローチが主流であったが、近年、個人およびグループ面接や観察によってデータを得る質的研究法の有用性が広く知られるようになり、この方法で研究に取り組もうとする研究者も増えてきた。しかし、手法・手続きが整えられ評価法も確立された量的研究法とは異なって、質的研究法を学ぶことは容易ではないと言われている。本科目では、質的研究法の入門編として、質的研究法の世界を概観し、質的研究法を用いた原著論文の詳細なクリティークを通して、質的研究法の特徴を理解し、研究法と論文作成法を具体的に把握し、また、事象の捉え方に関して視野を拡大することを目標とする。

文学部04200083

教授 小松 美彦「応用倫理演習Ⅲ」(科学的生命観と人生論的生命観Ⅴ) 2単位 A1+A2 水4 法文一号館318教室

科学が「生命」をいかに考えてきたのかを歴史的に考察すべく、西欧近代の生理学書(邦訳)を講読する。テキストとするのは、「生命とは死に抗する機能の総体である」の言葉で知られる、18世紀末葉の生理学者、グザヴィエ・ビシャの『生と死の生理学研究』(1800年)である。また、ビシャに多大な影響を与えた感覚論哲学と自然哲学の書籍(コンディヤック『論理学』、ニュー

トン『プリンキピア』および『光学』)を併読する。以上の作業を通じて、現代の生命観を省みる基礎をつくる。基本的にすべて邦訳を用いる。

文学部04200084

教授 堀江 宗正「応用倫理演習Ⅳ」(環境思想研究) 2単位 A1+A2 水2 駒場・教室未定

サステナビリティに関する文献を読み、応用倫理との接続について考え、議論を深める。

この演習ではとくに、サステナビリティ=持続可能性の概念や世界の政治経済の動向を広くまとめた深井慈子『持続可能な世界論』を読む。これまで持続可能性についておこなわれてきた主張を、この本は、体制内で改良を重ねていこうとする立場と、体制そのものを変革しようとする立場、そしてその中間的立場に分けて、最終的に共通点と相違点を明らかにする。

学生が持続可能性やサステナビリティに関する本を勉強しようとしても、なかなか良い本に出会えない。この本を手がかりにして、分からない言葉や考え方に触れ、さらにそれを調べていくことで、自分なりに「これからの世界」への見取り図を体得することが、この演習の最終目標である。

ただし、この本は15年前に刊行された本である。重要事項を調べる際には、それに関連して、何が起きたかも押さえる必要がある。それを通して、ただ受け身で読書するだけでなく、批判的に読解する姿勢も身につけたい。

□選択科目

文学部04200042

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義Ⅱ」(認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開)

2単位 S1+S2 木3 法文一号館312教室

2010年代以降、英語圏の認識論で盛んに論じられるようになった「認識をめぐる不正義」(epistemic injustice)の問題と、その不正義を是正する「認識をめぐる責任」(epistemic responsibility)の問題を考察する。そのことを通じて、「認知する」や「認識する」といった営みに否応なく孕まれている倫理的な次元を、その社会的な含意も踏まえつつ、明らかにする。

哲学の分野においては、認識論と倫理学は別々の領域に属するものとししばしば——「常に」ではないが——見なされてきた。しかしながら、私たちの具体的な生活の場面を考えてみると、多くの場合、倫理の問題は同時に認識の問題でもある。例えば、疾病・障がい・人種・国籍・性別・性的指向等による差別においては、認識自体が、力関係によって媒介され、相対的に弱い立場に置かれた者は発言権を奪われ、沈黙を余儀なくされることがある。また勇気をもって窮状を訴えたとしても、それは正当な証言としては見なされず軽視されるかもしれない(「証言をめぐる不正義」)。さらに言えば、そもそも、当事者の苦境にたいして、周囲の人々の関心が低いため、その苦境を表現する言葉が開発されず、その結果、本人はその苦境を訴える言葉自体を奪われているかもしれない(「解釈をめぐる不正義」)。

本講義では、まず主にフェミニスト認識論(ないし社会的認識論)による「認識をめぐる不正義」論の基本的な発想・概念を概観・検討する。その際、臨床の文脈において、その基本的発想・概念が、どう発展的に捉えられるのかにも触れたい。そのうえで、そういった不正義に対して私たちはどのような責任を負っているのかも批判的に考察する。そこでは同時に、潜在的偏見(implicit bias)・故意による無知(willful ignorance)・責められるべき無知(culpable ignorance)に対して、私たちはどのような点で責任を負うのかも検討することになる。

文学部04200043

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義Ⅲ」(自律についての関係的なアプローチ：現代行為論・自由論の一展開) 2単位 S1+S2 木4 法文一号館312教室

1990年代から2000年代にかけて英語圏で新たに登場してきた「関係的な自律論」(relational autonomy)について批判的に検討し、その臨床的応用も試みる。

従来の個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対して関係的な自律論は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目し、一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。講義では、関係的自律論において、従来の自律論の中心的諸概念、すなわち、自己決定・反省性・合理性・自己理解・統合性等がどう捉え直されているのか、またどう捉え直されるべきなのかを考察する。その上で、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的な意思決定プロセス(shared decision-making process)に相応しいものへと発展させる。

文学部04200044

教授 堀江 宗正「死生学特殊講義Ⅳ」(批判的死生学) 2単位 S1+S2 水2 法文一号館314教室

批判的死生学とは、死と生に関する、医療、心理療法、葬祭業者などつながりのある、臨床的、実践的な言説に対して、その妥当性を批判的に検証するとともに、社会的背景や社会的影響を批判的に分析する学問である。

この授業では、イギリスの社会学者であるトニー・ウォルターの『いま死の意味とは』をテキストとして用い、英語圏を中心とする現代人の死と生に関わる重要トピックを学ぶ。教員は日本の状況との比較の可能性について問題提起をおこなう。学生は、予習においては、テキストを読解すると同時に、日本での比較可能な事例を探してくる。

授業では、なるべく議論の時間を設けたい。

文学部04200045

非常勤講師 澤井 敦「死生学特殊講義Ⅴ」(死と不安の社会学) 2単位 S1+S2 月2 法文二号館一番大教室

普段あまり考えることはなくても、何かのきっかけから、自分はなぜ生きているのだろうと「生きる意味」を問う瞬間が誰の人生にもあるだろう。そうした問いについて考える時、「生」には「死」という終わりがあるという事実が否応なく私たちに迫ってくる。

とはいえこの死、とりわけ自分の死について、普段あまり考えることはないかもしれない。ただ、あまり考えることがなくても、死という終焉が必ず訪れるという事実は、漠然とした不安感となって、私たちの生をなかば無意識のうちに覆うものとなる。

哲学・心理学・精神医学などにおいて、以上のような事態はさまざまなかたちで考察されてきた。ただ、この授業でとりわけ焦点を当てたいのは、端的に言えば、死や不安の社会的様相である。

死という不可解かつ不可知の現象は社会的にどのように処理されてきたのか・いるのか、また死を基底とする不安感や社会や文化の変動に応じてどのような様相を呈することになるのか。このような問いについて社会理論の観点から考察することがこの授業の目的である。

文学部04200046

特任教授 会田 薫子「死生学特殊講義Ⅵ」(臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅱ) 2単位 A1+A2 水6 法文二号館二番大教室

臨床死生学および臨床倫理学の諸課題に関して、本学内外の研究者の研究発表とそれに基づく討議を行う。本科目は「臨床死生学・倫理学研究会」として公開されており、一般の医療・介護関係者の参加が多い。

演者およびテーマや授業運営についてメールにて知らせる場合があるので、履修者・聴講者はメール・アドレスを予め担当教員に知らせ、発表予定のテーマに関し、できれば予習した上で授

業に参加することが望ましい。

本研究会では、医療・介護現場の実践者ないし現場に臨む研究者の発表を多くとりあげ、現代社会における実際の課題について理解し考察を深めることを中心とする。また、当該学問領域の理論的な進展も扱う。

なお、授業の運びに関して理解してから研究会に参加することが求められるので、履修希望者は初回のオリエンテーションに参加すること。やむを得ない理由によってオリエンテーションに参加できない場合は、担当教員にメールにて問い合わせること。

文学部04200047

特任教授 会田 薫子「死生学特殊講義Ⅶ」（臨床老年死生学入門） 2単位 A1+A2 木3 法文二号館一番大教室

超高齢社会において臨床死生学と生命倫理学・臨床倫理学が交差する領域における諸課題の理解と思索をめざす。

予定トピック：超高齢社会の医療とケアに関わる諸問題（人口動態、加齢のプロセスに関わる臨床的な諸問題、医療と介護の制度、End-of-Life Care (EOLC) の概念、EOLCと緩和ケアとその心理・社会・スピリチュアル面の諸問題、延命医療の差し控えおよび終了に関わる問題、「尊厳死」・安楽死・医師による自殺ほう助、脳死、臓器移植など）

文学部04200048

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義Ⅷ」（ケアの倫理） 2単位 A1+A2 木4 法文一号館312教室

臨床や教育、また日常の至る場面において、ケアの重要性が盛んに指摘されている。にもかかわらず、その内実には吟味されていない。こういった現状を踏まえ、現代倫理の鍵概念となった「ケア」について、その複雑さと困難さを尊重する仕方、批判的に考察していきたい。

より具体的には、英語圏で1980年代以降に登場してきたケアの倫理 (Ethics of Care) においてケア、またそれらの概念と不可分な、ニーズ・応答責任 (responsibility) ・脆弱性 (vulnerability) ・依存性 (dependency) ・受容性 (receptivity) といった概念が、どのようなものとして捉えられてきたのかを検討する。とりわけ、ケアの倫理の代表的な論者であるキャロル・ギリガン、ネル・ノディングズ、エヴァ・キテイの議論を丁寧に見ていくことで、人間の傷つきやすさと依存性を根本に据えるケアの倫理が、主流の倫理学（もちろん一枚岩ではないが）に対して、どのような独自の貢献をしようのかを考察したい。

文学部04200049

准教授 乗立 雄輝「死生学特殊講義Ⅸ」（死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの考察） 2単位 A1+A2 水5 法文一号館214教室

死と生をめぐる諸問題に、偶然や確率という事象、概念、およびそれらにまつわる諸理論がどのように関わっているのか、もしくは、関わりうるのかを考察する。

各人にとって自身の生と死は一度きりの事象であり、いずれはみな死に至ることが確実と考えられるにもかかわらず、しかし、ある意味では、そうであるがゆえに、死と生をめぐる私たちの思考には、意識するか否かにかかわらず、確率や偶然（性）にまつわる思考が深く関わっている。

また、人間は、不慮の偶発的事態に起因する不具合や不幸を避けようと長年にわたって努力を積み重ね、その結果、ある程度の成果を挙げてきたが、そのことの副産物として、逆に合理的な思考ができなくなってしまったり、旧来の倫理規範や価値観がゆらぐ事態が現れつつある。

本講義では、生と死の問題について、偶然や確率をめぐる議論がどのようにかわるのかを、様々な哲学者たちの主張に注目しながら考察していくことを試みる

文学部04200071

教授 小松 美彦「応用倫理特殊講義Ⅰ」（先端医療と死生観Ⅱ） 2単位 S1+S2 金4 法文一号館214教室

20世紀後半、日本を含めて世界的に新たな死が「つくられた」。「脳死」である。そして現在、新たな死が「つくられつつある」。「安楽死・尊厳死」である。しかも、後者にあつては、「死」の言葉が冠せられないまま量産へと向かっている。日本の場合、「終末期医療」や「人生の最終段階における医療・ケア」という言葉がそれである。その表看板は「医療・ケア」でありながらも、実体は「死」への強制ないしは甘き誘いにほかならないのである。

本講義では、日本と世界のこのような現状に鑑み、脳死と安楽死・尊厳死について多角的に検討し、それらが推進される構造を生権力（ミシェル・フーコーが示した権力概念）と経済財政政策の観点から分析する。そして、以上の考察作業を通じて、「人間にとって死とは何か」「人間の尊厳とは何か」を探究する契機を獲得する。

文学部04200072

教授 小松 美彦「応用倫理特殊講義Ⅱ」（研究不正・非人道的研究・その歴史構造） 2単位 A1+A2 金4 法文一号館314教室

「研究倫理」という学問分野には大別2種類の内容がある。ひとつは、データ捏造・論文盗用・研究費の流用など、研究者個人・集団の不正行為をめぐるものである。またひとつは、人体実験・軍事研究など、広く人道にかかわるものである。近年の日本の研究倫理の授業では、前者に焦点が当てられ、守るべきルールが教授されがちである。しかも、そこでは、ルールを守ることが即ち倫理と見なされる傾向にある。

しかし、人文社会系研究科の開講科目である本授業は、それとは異なる内容となる。すなわち、前者の研究倫理を押さえたうえで、研究とルール（法）と倫理の関係を考察し、後者の研究倫理に重心を置く。具体的な事柄としては、STAP細胞問題、第二次大戦中の日本における人体実験（731部隊と九州大学生体解剖事件）、大戦後の総括の有無から今日に至る生命科学技術と軍事研究などを扱う予定である。そして、守るべきルールが守られず、非人道的に思われる研究が繰り返される全体構造を、そのなかで既存の生命倫理などが果たした役割とともに、歴史的に考察する。以上を通じて、一個の学問分野を多角的・批判的に検討する基本姿勢を身につけ、受講者一人ひとりが（研究）倫理について熟考する契機とする。

文学部04200073

非常勤講師 鈴木 晃仁「応用倫理特殊講義Ⅲ」（病院における患者の死の歴史 c.1500-c.2000） 2単位 S1+S2 水5 法文一号館211教室

現代の社会では「病院」という制度が医療の根本的な施設となっており、最先端の医療の技術開発がすすめられ、同時に非常に多くの死が病院で起きている。このように病院が死の中心的な舞台となっていく過程は、医療者にとっても患者にとっても非常に興味深い多相な力学を経ており、それを分析することが医学史の中心的な課題となっている。ことに、患者の死は、患者だけではなく、医療者、患者、家族にとって複雑な意味を持っている。この授業は、ヨーロッパから始まり、各国に拡散していく病院を、医療者と患者の関係の場としての歴史を取り上げる。それをルネッサンスからポスト工業化時代までの大きな流れと組み合わせて説明をする。

文学部04200074

准教授（新領域） 福永 真弓「応用倫理特殊講義Ⅳ」（食と場所の環境倫理） 2単位 A1+A2 火4 法文一号館210教室

食とは、自然が生み出したものを人間の身体に取り入れる行為であり、身体という場は人と自然が関わる場でもある。また食は、食料を得て加工し食卓に並べるまでの過程も、食べるという行



為自体も、きわめて文化的かつ社会的行為である。しかも、グローバルに広がる食の生産・消費・廃棄のシステムに支えられた現代の食において、わたしたちは見知らぬ他者が生きる場と生産・消費・廃棄のシステムを介してつながっている。本講義では、大気海洋システムまでも大きく人間活動に影響を受け、人為起源の生物系群に地球が覆われた人新世時代において、食システムがいかなる変容を求められ、実際に変容しつつあるかを追いかける。そして、よい食とは何かについて、おいしい、健康である、倫理的である、持続可能である、公正である、真正である、など「よさ」を表現する概念と実践をたどりながら考える。それは同時にわたしたちが生きる場所とは何かについて考えることでもある。本講義は二つの目標を設定する。一つは、現在の食システムを理解した上で、よい食とは何かを評価する軸をみずから見だし、実践する方法を探求することができることである。もう一つは、人新世時代において自然らしさ、人間的であるとは何かについて深く考察し、具体的な社会のデザインについて想像する力を得ることである。

文学部04200075

非常勤講師 田中 智彦「応用倫理特殊講義V」（現代の「野蛮」に抗うために） 2単位 A1+A2  
金4 法文一号館114教室

この授業では「現代の野蛮」という観点から、現代社会とそこに生きる私たちの生の諸問題を考察するとともに、そうした「野蛮」に抗うための諸条件を検討する。そして今年度は特に、「境界」を一つのキーワードにして、「野蛮」の内的・外的な淵源や来歴にも光を当てて探究を進めてゆく。

ここで「境界」とは、ただ越えられるべきものとして問われるわけではない。むしろこの授業が出発点とするのは、例えばレヴィ＝ストロース（Claude Lévi-Strauss）が提示するような、「人類から「野蛮人」（あるいはそう思うことにしたすべて）を除外する思考態度は、まさに当の野蛮人自身のもっとも顕著な特有の態度なのである」「未開人とは、何よりも未開人だと信じられた人間のことなのである」といった視点である。こうした視点からするならば、私たちはある仕方で境界を引くことで「世界」を認識し、「人間」を定義していることになる。そしてそうであるとするならば、その境界が今日ではどのような仕方で引かれているのか、なぜ、どのようにしてそうなったのかを問うことが重要であり、また必要にもなるだろう。

このような問いは当然のことながら、近代以降の「人間」「自己」「身体」をめぐる認識や定義の変容についての、またそれと相関する政治経済や科学技術のありようについての問いを引き寄せることになる。そのようにして私たちの生きる「現在」と、そこへとつながる「過去」とをふまえるときに、私たちは「未来」をどのように描くべきか／描きうるのかという問いに対して、ある見通しを与えることも可能になるだろう。実際にも今日、政治経済や科学技術のありようは、「人間の人間性」とも言いうるものをも変えつつあるように思われる。そこにおいてわたしがなおも倫理的でありうるとしたら、それはどのようにしてなのか——そのこともあわせて探ってゆくことにしたい。

文学部04200076

非常勤講師 植田 今日子「応用倫理特殊講義VI」（「丸腰」の人びとの生存技術） 2単位 A1+A2  
金2 法文一号館214教室

この講義でいう「丸腰」とは、武力を持たないということよりは、貨幣、集権化した権力、労働力といった資源を十全に持たないことを指している。講義ではとりわけ、日本の郡部や第一次産業を担う人びとに注目し、彼らが「丸腰」でありつつ、どのように災害や社会変動といった危機を克服し、自らの生存環境を維持してきたのか、その技法のありかと多様性を理解し、見出せるようになることを目標とする。

現在の日本では、市部（および東京23区）の人口が91%を占め、郡部には8.6%が住むのみであ

る。また誰もが生存に不可欠なはずの第一次産業には、労働人口のわずか4%の人びとが従事する（2015年時時点）。そして高齢化や人口現象が生じているのもこのエリアに重なるだろう。しかしよく目をこらしてみれば、ここに暮らす人びとを安易に均質化することはできない。人間が生まれてから死ぬまでには、赤ん坊の分娩から看病、介護、看護、看取りにいたるまで、個人ではとうてい応じ切れない局面が多々ある。加えて大きな社会変動や災害など、外部からもたらされるインパクトも予期し得ない。私たちは「丸腰」で、どのようにこれらの場面に向き合うことができるだろうか。家族に頼るか、市場に任せるか、自治体を頼るかという閉塞から目を転じて、多くの「丸腰」での選択肢がありうることを様々なケーススタディで触れ、議論を重ねたい。外国の事象を見るような目で、日本の小さな社会が備えてきた仕組みや実践をたどり、それらの存在に気づけるようになることを目指す。

文学部04200077

非常勤講師 村上 靖彦「応用倫理特殊講義Ⅶ」（現象学的な質的研究入門） 2単位 A2 集中  
ナラティブ・メディスンのトレーニング方法を応用しながらインタビューデータの現象学的分析への習熟を行う。担当講師による講義とグループワーク、希望者による発表を組み合わせる。担当講師が提供するデータは看護師など医療者の語りおよび子育て支援の支援者の語りなどになる。

教育学部09201402

大塚 類「臨床教育現象学概論」（具体事例に基づき臨床現象学を学ぶ） A1+A2 木5 赤門総合研究棟A200講義室

臨床現象学では、私たちが日常生活において体験するさまざまな出来事を「事例」として、現象学や哲学の観点から考察することを試みます。事例に基づく質的研究の一種だと言えるでしょう。

本講義では毎回、若者・家族・教育にまつわる個別具体的な事例を取り上げます。講義者が体験したり見聞きしたりした出来事だけではなく、マンガ、エッセイなども事例として取り上げる予定です（参考資料参照）。人間の普遍的な経験構造を明らかにしようとする学問である現象学には、「個別は普遍に通じる」という言葉があります。個別具体的な事例を深く考察できれば、「私にも思い当たる節がある」、「そういうこともありうるかもしれない」という形で、普遍的な人間理解へと繋げられるはずで、受講者のみなさんが、自分事として当事者性をもって臨めるような身近なトピックを、深く考察することを通して、みなさんの物事を見る観点や、自己／他者理解が深まることを目指します。

医学部02218

教授・准教授・助教 赤林朗、瀧本禎之、中澤栄輔、山本圭一郎「生命・医療倫理Ⅰ」 A2 金1/2 医学部三号館S101

本講義では、保健・医療の分野においてしばしば生じる意思決定が困難な問題を、主に倫理的側面から検討する。授業では、医療倫理学の基礎理論を講義するだけでなく、具体的なケースを用いたディスカッションも行うため、受講者の積極的な参加が望まれる。

本講義は、将来に臨床や医療政策に携わる人にとって有益であるのはもちろんだが、それ以外の人にとっても、いろいろな立場の人との議論を通じて、自分の倫理的思考を見つめ直すよい機会となる。

医学部02246

教授・講師・助教 上別府圭子、佐藤伊織、キタ幸子、副島堯史「家族と健康」 A1 月1/2 医学部三号館1FN101講義室

健康総合科学の対象としての、家族と健康の考え方の基礎を学ぶ。家族は社会を構成する最小

単位であり、また、家族は一単位として健康総合科学実践の対象となる。国内外の、家族心理学・家族看護学・家族療法などにおける知見および理論を学び、さらに事例を通して、その実践の試みについての見識を深める。加えて、家族を健康総合科学研究の対象とする際に必要な基礎的知識と考え方を理解する。

農学部060500021

教授 関崎勉「生命倫理」 1単位 S1 月5 農学部2号館化学第1講義室

ヒトはヒト以外の生命を喰うことによってしか生きられないという人間中心主義的な宿命を負う。一方、人間社会の利益、科学技術の進歩、ヒトとヒト以外の生き物との間での命の価値の違いなど様々な理由でヒトや動物の命の扱い方が異なっている。人の社会と人の生命における倫理問題だけでなく、生物資源問題、動物倫理、ヒトと動物の絆、食品安全、家畜防疫、感染症など、「食」に関わるさまざまな生命の関わり方を取り上げる。それらを様々な角度から実例をもとに聴講し、農における生命倫理として多層な生命をどう秩序立てて理解し、人類の福祉を追求すればよいかを、自身の専門分野とは異なる立場からの情報も取り入れて、これまでとは違う発想、価値観、文化、思想などについて考える機会とする。

バイオテクノロジーと社会との接点の問題という性質では、A2タームの「技術倫理」と関連する。

農学部060500031

教授 根本圭介「技術倫理」 1単位 A2 月5 農学部プレハブ講義室

食と生活を中心に現代の科学技術と社会との接点において、価値観を伴って判断を下さなければならない、ときに相矛盾するさまざまな相互作用を多方面から学ぶ。食の安全をめぐるリスク科学の基礎、生産者・流通関係者・消費者・行政の立場からのリスク評価/リスク管理/リスクコミュニケーション、具体的な安全性評価と技術管理、コミュニケーションのあり方を考える。

教養学部08F1301

特任准教授 定松 淳「科学技術インタープリター概論」 2単位 A1+A2 火6 教室未定  
詳細未定

教養学部08D1002

教授 石原 孝二「応用倫理学概論」 2単位 A1+A2 水2 教室未定  
詳細未定